
コミュニティと**集団精神療法**

(3)

— Rovinj でのスモール・グループ —

藤 信子

8月の終わりから9月の初めにかけて、第19回国際集団精神療法精神過程学会(IAGPP)に参加するためクロアチアのRovinj(ロヴィーニ)に行った。海に突き出た小さな半島が旧市街であり、その真ん中に高い鐘楼のある聖エウフェミア教会があるが、この教会が丘の上に建っているため、街の上に教会がひとときわそびえたっている。プレコングレスが終了した午後、この旧市街と聖エウフェミア教会に出かけた。教会へ上る狭い坂道はツルツルになった石畳で、その坂道の両側にところどころテーブルを出して食事やお酒を楽しんでいる人たちがいた。その狭い

坂道を登りきった丘の上の教会の庭から、夕方であるにもかかわらず、真昼のように輝く海と島の眺めが見下ろせるのだった。

2日間のプレコングレスは「ソーシャル・アンコンシャス」のワークショップに出た。昨年リスボンのGroup Analysis in Europa(GAS)のメディアン・グループでいっしょだったスウェーデンとイタリアの女性と一緒にだったので、懐かしくほっとした。グループの中では慣れるまで聞き取ることに苦労したけれど、日本から一緒に行った友人二人も同じグループだったので休み時間に補いあいながら参加した。

3日目から4日間の kongress 中に、毎日90分の継続するグループがある。これはサイコドラマ(PD)、グループ・アナリシス(GA)、グループダイナミクス(GD)などのオリエンテーションと、グループサイズのスモール・グループかメディアン・グループ等が明記されたものに、kongressのサイトで申し込むようになっていた。一応 kongressの公用語は英語だけれど、グループによっては、英語以外にスペイン語、イタリア語、クロアチア語なども併用することが書かれている。このグループを申し込む時に、3年前のカルタヘナ(コロンビア)での IAGPPの時のスモール・グループや昨年リスボンでのメディアン・グループの体験がとてもよかったと感じていたので、自分の英語力を顧みず、GAオリエンテーションのスモール・グループに申し込んでいた。一日目の基調講演の後、グループの場所に行くとき私たちのグループの場所は、部屋というには仕切られ方が不十分な一角だったので、ちょっと驚いた。コンダクターと、メンバーはA、B、C、D、E、FとG=私で英語が母語であるメンバーは一人もいなくて、皆女性というグループ構成だった。ちなみに、B,Cはヨーロッパの同国人、E,Fはアジアの同国人である。始まって間もなく一人のメンバーが私に日本のグループとヨーロッパのグループとの違いはあるかと聞いてきたので、欧米のグループを体験した人から、日本のグループは始まった時の沈黙が長いと

聞いていると答えた。帰ってきてトレーニング・グループの文献を読んでいたら、同じような質問をみつけた(Horwitz 2014)。グループが始まった時の沈黙に対して、よそから来た脅威的なメンバーに対して出される質問の一つのパタンのようなものである。確かにヨーロッパの人にとって、遠い日本から来ているけれど、どんなことをしているのかという興味と、話が通じるのだろうかという不安を持つことは、珍しいことではないだろう。そう考える一方、グループの始まりの沈黙に対して、コンダクターへの不満から、自らが質問を始めるといったことになったのだとも解釈できるということである。このセッションは、日本の引きこもりとイタリアのマンマバンビーノは同じようなものかとか、難民、ボスニアの戦争の話などがでた。

2日目はE,F二人が欠席、6名のグループとなった。AがDの論文を読んだことを話す、戦争の結果、名前等を書き替えさせられた、という話。名前やアイデンティティを変えさせられるということに私は少しショックを受けていた。日本はホモジェニアスかと聞かれ、そうではないという話をする。現在の日本の問題は、日本の軍隊は防衛のためだけ、それを変えようとする政治家がいると言うと、名前を変えさせられたDは、とても穏やかな印象の人だけれど、「守るだけの軍隊なんて信じられない」と驚く。私の気持ちとしては、中立国はいくつもあって、それなりに国民皆

兵のスイスとか、いくつかの形態があると思っただけで、20年前に戦争が終わった国から見るとそうなのか、とそれ以上言わなかった。

3日目にBがコンダクターはもっと強いリーダーシップを発揮するべきだと言い出し、Cも沈黙が多く時間ももったいないと言う。コンダクターのスタイルはそれぞれだし、Aと私は沈黙は嫌いではないと言った。私が沈黙しがちで何を考えているのかというCの問いに、私は戦争の加害者であることを忘れていたと思っている日本人について連想していると答えた。何故戦争のことを忘れてはいけないと思うの？とAに聞かれ、私は、当たり前だと思っていた事を改めて聞かれ戸惑い、グループの終わりまで考えることにした。コンダクターに対する攻撃がさらにこのカンファレンスの企画も及び、グループプロセスへの不安が高まった。B、Cは明日はもう来ない、と言い出して、このセッションが終わった時にはヘトヘトという感じだった。

4日目に来ないと言っていたCが来て、Aと私が、3人になるかと思っていたとCに言う、嫌になったら途中で帰るからと言って席に着く。私はコンダクターへの不満は、この部屋の壁が十分でないため、不安になったからではないかと感じたことを話した。何故戦争が怖いとか、忘れてはいけないと戦争の話をするのかは、日本はこの70年戦争したことがない、ヨーロッパに来るといろんな戦争の話が出るので、怖くなったのだと思う。

昨日の夕方は疲れきっていたということを見ると、Cもそうだった、けれどとても良い本を見つけて読んだと言う話をする。私が疲れきっていたということにCが同じ感じをもっていたと感じられたことが、一つの展開のきっかけになったと、今プロセスを振り返って思う。Cにとってあまり話さず、話すと暗いことを言う東洋人に、不安をかき立てられていた時に同じ感じだったということでCは私が理解できると感じたのだろう。昨日の怒りや不安が治まり、皆で外国に行った時に、いろいろなシステムの違いに困惑する話になり終了した。

国や地域が違うところで感じ方、考えが違うのは当たり前とはいえ、同じような職業や関心領域に従事していても、育ち暮らすコミュニティという背景の違いを感じる事ができたグループだった。そして私は戦争についてかなり観念的な捉え方をしているようだ、このグループは教えてくれた。ただそれが悪い事かどうかは難しい問題だと思う。

文献

Horwitz, L. (2014) Listening with The Fourth Ear, Unconscious Dynamics in Analytic Group Psychotherapy. Karnac